



TITLE:

# 古代チベット帝國の千戸とその下部組織：百戸、五十戸、十戸

AUTHOR(S):

岩尾, 一史

---

CITATION:

岩尾, 一史. 古代チベット帝國の千戸とその下部組織：百戸、五十戸、十戸. 東方學報 2013, 88: 358-343

ISSUE DATE:

2013-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/180564>

RIGHT:

# 古代チベット帝國の千戸とその下部組織

## —— 百戸，五十戸，十戸 ——

岩 尾 一 史

### 1 は じ め に

チベット史上初めての統一王朝である古代チベット帝國（吐蕃）は，独自の軍事制度と農耕民に支えられた強固な經濟基盤によって，チベット高原のみならず中央アジアに進出し，8-9 世紀において唐，突厥，ウイグル，アッバース朝などと覇權を競った。一方で，帝國は國家制度を整備するため早期に文字を制定して（630 年代から 640 年代<sup>1)</sup>），文書行政システム，土地徵稅制度を完成させた。これらの國家制度の存在こそが，チベット帝國がその建國の 6 世紀末か 7 世紀初から 842 年までの二世紀半の間，國家經營を續けることができた理由であると豫想できるが，一方でチベットの國家制度の詳細は未だ明らかにはされていない。

古代チベット帝國の諸制度のうち，本稿の關心でもある軍事制度は，比較的早くから研究が進んだ分野である。その主たる理由はチベット語史書のうちに軍事制度の根幹であるルと千戸についての記述がみえるからであり，すでに 1949 年の段階で Tucci がルと千戸の概略について述べ，その軍事制度が北方遊牧民の組織に似ていることを指摘している（Tucci 1949, p. 476）。

Tucci の研究を承け，我が國の佐藤長もチベットの軍事制度が北方遊牧民の組織に類似することを確認した上で，チベット独自の戦法や農耕民による經濟的基盤の存在等，チベット独自の特徴について指摘している（佐藤 1977 [1958-59], pp. 750-763）。佐藤氏は同書において次のようにも述べている。

「唯我々が頗る注意を惹かれるのはこの軍組織が甚だ北方遊牧民の組織に似ているこ

---

1) チベット文字の淵源と制定年代については，van Schaik 2011 を参照せよ。

とである。既にトゥッチ氏はこれに注意し、トルコ族、モンゴル族のそれに近く、萬千百十の部に分かれたれていたという (TPS, p. 738 [=Tucci 1949, p. 738. 筆者注])。千戸は問題ないとして、萬戸、百戸、十戸の事例は今のところ當時のチベット文獻には発見できない (下線は筆者)。 (佐藤 1977 [1958-59], p. 756)

佐藤の書 (初版) が出版されてから、半世紀餘りの月日が過ぎ、その間に多くの新出史料が公表され、軍事制度研究も進展した<sup>2)</sup>。それらによって佐藤氏の見解を改善することは可能である。例えば萬戸については出土史料中にその存在が確認され、実際には軍事単位ではなく行政単位であることが判明している (岩尾 2004, Iwao 2007)。また千戸より下部単位である百戸、十戸についても、史料状況が改善した今ではある程度の考察が可能である。そこで本稿では、現在の研究状況・史料状況を改めて確認し、特に千戸の内部構造について考察したい。

## 2 チベットの軍制：ルから千戸まで

まず、チベットの軍制について判明していることを、先行研究をもとに簡単にまとめておこう。

建國からしばらくしてチベット高原には、ル (ru) が置かれた。ルとは「角」の意である。Uray (1960) によると、最初に 684 年、中ル、右ル、左ルの三ルが設置された<sup>3)</sup>。後に 733 年頃に支部のル (ru lag) と合わせて四ルと呼ばれるようになる。

チベットの版圖が擴大されるにつれ、非チベット人の地域にもルが設置されるようになり、東の蘇毘が居住していた地域にはスムパのル (sum pa'i ru) が設置された<sup>4)</sup>。一方で、西のシャンシュンの地域には「シャンシュンの 10 千戸」が置かれた。

各ルは幾つかの軍千戸によって構成されていた。中央の四ルに関しては、各ルに二人のル長 (ru dpon) が任命され、それぞれがルの半分を擔當した。ル長は 4 つの千戸を支配したという。つまり各ルには合計 8 の千戸が屬したことになる。さらに、各ルには小千戸と親衛千戸が存在したという。スムパのルに屬する千戸の数は史料によって異なり、『賢者の喜宴』によると 10 の千戸に 1 つの小千戸、『華鬘』によると 8 の千戸に 1 の小千

---

2) 關係する先行研究については、第 2 章を参照せよ。

3) ただし、ルの増設時期とその年代については山口の異論がある (山口 1983, pp. 862-871)。

4) 山口 (1983, p. 870) は sum pa を「第三」の意味にとり「支部第三翼」と呼んだが、岩尾 (2000, p. 2, n. 4) で指摘したとおり従えない。

戸であると伝えられる（岩尾 2000, pp.6-8）。

ルが設置された地域よりも外側には、khrom と呼ばれる組織が置かれた。この組織の存在を初めて明らかにした Uray (1980) は、これを military government と呼び、合計で 8 つの khrom をチベット語史料中に見いだしている。山口瑞鳳はこれを「軍團」と譯し（山口 1981, p. 12: 「カルツェン軍團」 mkhar tsan khrom), 一方で武内紹人は「軍管區」と譯した（武内 1990, p. 39）。我が國では「軍管區」の譯語が比較的定着している<sup>5)</sup>。

軍管區はおよそ 2 つか 3 つの都市で構成されていたらしく、例えば瓜州軍管區では瓜州、肅州、沙州の三都市を支配下に入れていた。なお、各軍管區の長は軍隊長（dmag dpon）あるいはル長（ru dpon）と呼ばれ<sup>6)</sup>、一方で出土史料や漢籍史料には「節度使」として登場する（Uray 1980, p. 312）。

チベットの軍事制度における實質的な軍事單位は千戸であった。例えば『敦煌年代記』（P. t. 1287）の記事に、

「【770 年代後半】御領地が大きくなり、隴山山脈以西を【ツェンポの】御手に入れ、トンキャブ（通頼）の萬戸を 5 つ作った。デロンの大國を新たに生じさせた。（中略）民のうちでは、ドルテ、チュクツァム、テゾム【の千戸】が勇猛の徴として、虎の小麝？（thog bu）を賜った。」

chab srId che ste long shan la rgyud yan chad // pyag du bzhes nas / mthong khyab  
khrI sde lnga btsugs / bde blon khams ched po gchig gsar du bskyed do // （中略）  
'bangs kyI nang na / dor te pyug tshams ste 'dzom dpā' ba 'I mtshan mar / stagI thog  
bu stsal to //

（P. t. 1287 『敦煌年代記』 ll. 383-386. Cf. Bacot *et al.* 1940-46, pp. 115, 153-154）

とあり、文中で現れるドルテ、チュクツァム、テゾムは全て中ル所屬の千戸であるから（岩尾 2000, pp.17-20）、これらが實質の軍隊單位として活躍したことが伺える。またミールンやマザールタークの砦にて發見された古チベット語木簡からは、軍人の歸屬單位がルではなく千戸であったことが確認される（岩尾 2000, p. 24）。

5) ただし khrom が常に「軍管區」を意味するかは、いまだ検討の餘地がある。本文中でも述べたとおり、khrom の長はル長あるいは軍隊長であり、また史料によっては山口の譯した「軍團」の方が文脈に合う場合もあるからである。詳細は別稿にて述べる。

6) Takeuchi は軍管區の長がル長と呼ばれること、また瓜州軍管區に數千戸が屬するとの推定から、一軍管區はルの半分の規模を有したと考え、さらに軍管區は後にルへと改定される豫定だったのかもしれないと推定する（Takeuchi 2004, p. 56）。

千戸はチベット中央のル以外でも設置されたことが確認されている。特に 786 年以降チベットの支配下に入った敦煌では、チベット政府が漢人の軍千戸を設置したことが知られる。敦煌漢語文書には千戸は「部落」として登場し、最大で rgod sar kyi sde（阿骨薩部落、曷骨薩部落）、stong sar kyi sde（悉董薩部落）、snying tsoms kyi sde（寧宗部落）の三部落が設置された（Takeuchi 1994, p. 849; 岩尾 2003, p. 10）。

千戸を管轄するのは千戸長（stong dpon）であり、少なくとも沙州に置かれた漢人の軍千戸では、中央から派遣されたチベット人が千戸長に任命されている（Takeuchi 1994, p. 858, n. 11）。また千戸長の他に千戸小長（stong cung）が一つ設けられ、非漢人が任じられた<sup>7)</sup>。

沙州の漢人部落の場合、これら長を補佐するために千戸副長（stong zla）が漢人の中から任命された。P. t. 1089 によると、ある子年に沙州において 2 つの部落が設置され、各部落の千戸副長として閻ペンと康セウタムなる漢人が任命された<sup>8)</sup>。中央からやってきたチベット人の千戸長、千戸小長に代わって實務を擔當したのがこれら千戸副長だったことは間違いなく、そのためであろうか、彼ら千戸副長は漢語文書においてあたかも千戸の長の如く「部落使」と呼ばれていたのであった（Takeuchi 1994, p. 858, n. 11）。

では、千戸の内部構造はどのようなものであったのか、次章以降にて述べたい。

### 3 千戸の内部構造：tshan

古代チベットにおける千戸の下部組織の存在を具体的に指摘したのは、Uray が最初であろう（Uray 1982）。Uray は、tshan という組織が敦煌出土チベット語文書に現れることに注目し、千戸の下部組織にあたると指摘した。その後、Takeuchi（1994）は出土文書に現れる様々な tshan を比較検討することによって、その単位の機能を明らかにした。その結論を簡単に述べると、① tshan とは千戸の下部組織であり、② 1 tshan は 50 戸で構成された。③ また機能や役割に応じて、dog tshan, dar tshan や khram tshan など様々な tshan が存在した、ということになる。Takeuchi はこのような千戸と tshan との関係をまとめて stong sde - tshan system と呼ぶ。

---

7) P. t. 1089, ll. 54-55 によると、子年に敦煌に二つの千戸が設置され、それぞれの千戸小長に tshar lo spa sho と ser lha rma が任じられている。P. t. 1089 の譯については、Lalou 1955, p. 184, 山口 1981, p. 19, 王・陳 1989, p. 111, Scherrer-Schaub 2007, p. 298 等を参照されたい。

8) P. t. 1089, ll. 58, 62. Cf. Lalou 1955, p. 184, 山口 1981, p. 20, 王 1983, p. 119, Scherrer-Schaub 2007, pp. 298-299 等。

チベット支配期の敦煌において、千戸の下に置かれた各 tshan は lnga bcu rkang (五十戸長)<sup>9)</sup> なる役職を有する漢人によって統率されていた。例えば次の通りである。

五十戸長である孔宣子の tshan 【に屬する】王ブンツォン

lnga bcu rkang / khong svan tse'i tshan wang bun tsong

(Thomas 1951, p. 40, Takeuchi 1994, p. 849)

Takeuchi (1994, pp. 852-853) は、tshan が同時期の漢語出土文書に現れる「將」に、そして lnga bcu rkang が「將頭」にそれぞれ當たることを指摘した。將については、チベット支配下の敦煌に現れる獨特の行政單位であり、一つの將に約 50 戸が屬すること、また左右それぞれに 10 の將があり、左右合わせると全部で 20 の將が存在したはずであるという指摘が、敦煌漢語文書の研究からなされていた(藤枝 1961, pp. 248-249, 池田 1990, p. 55)。このことをふまえ、Takeuchi は、一つの漢人軍千戸が 20 の tshan (=將) で構成された、と指摘したのである。なお、沙州の將頭は税や差役を免除されている代わりに自らの將に屬する戸から税を集め、それを軍管區の本部がある瓜州に届ける義務があった(池田 1990, p. 56, Takeuchi 1994, p. 852)。また、50 戸の tshan だけではなく、他にも dar tshan (小隊?) や khram tshan (經濟的機能を持つ?) などの規模が異なる tshan が存在していること、敦煌のみならずコータン地域にも tshan が存在したことを Takeuchi (1994, pp. 853-856) は指摘している<sup>10)</sup>。

さて、Takeuchi のモデルによれば、一つの千戸には、50 戸で構成された tshan=將が 20 屬している。すると必然的に、千戸には百戸という單位が存在しなかったという結論になる。しかし、實際のところ百戸長にあたるらしき役職が存在することが最近判明したのである。敦煌文書にしばしば現れる brgye'u rje なる役職がそれである。例えば契約文書 P. t. 1087 には次のようにある。

「千戸長、千戸小長、brgye'u rje、五十戸長 (lnga 【bcu】 rkang) に對し、」<sup>11)</sup>

(P. t. 1087, l. 2)

9) lnga bcu は「50」を意味し、rkang は “stem, base or marrow” と解釋できる (Takeuchi 1994, p. 849)。本稿では便宜上「五十戸長」と譯する。

10) なおコータン地域の tshan や、その他 tshar, srang といった組織については Takeuchi 2008 も参照せよ。

11) stong pon stong chung dang brgye'u rje lnga rkang la. 文中の lnga rkang は、Uray (1982, p. 547), Takeuchi (1994, p. 849) の指摘する通り、明らかに lnga bcu rkang の省略形である。

「保証人たちはシェンシェン（人名）を引き連れて、【千】戸の諸役人である千戸長、千戸小長, brgye'u rje, 五十戸長 (lnga rkang = lnga bcu rkang) の手に引き渡し」<sup>12)</sup>

(P. t. 1087, ll. 6-7)

この brgye'u rje については, Uray (1964, pp. 186-187; 1982, pp. 546-548) が「100 の半分の主」の意, すなわち五十戸の長であると指摘していた。しかし同時に, Uray はこの brgye'u rje を直後に現れる lnga bcu rkang (五十戸長) とは, 職掌の差異は不明としつつも, 異なる役職である, と指摘したのである。一方, Takeuchi (1994, p. 849) は, brgye'u rje と lnga bcu rkang が同一の役職である, と考えた。

Uray, Takeuchi の説に對し些かの疑問を呈したのが岩尾 (2007, p. 184) である。岩尾は佛教界への寄付納入リストである敦煌出土チベット語文書 IOL Tib J 1357 を研究し, その構造が次のようになっていることに注目した。

[...] デルツェの brgye'u rje ギェレ・ペンレクの tshan に,

1. 張ラレクの khram tshan

ナムダク・ガンデン寺の施主 張ラレクのキャ (=徴税単位)<sup>13)</sup>

- ク ・ ガーヲ (難陀) 寺の【施主】…のキャ
- ク ・ ヨンテン寺の施主 索ウエンコクのキャ
- ク ・ ペーモ (蓮華) 寺の施主 宋ツインフィのキャ
- ク ・ ドンドゥブ (悉達) 寺の施主 陰ヒン (興?) 云のキャ
- ク ・ リンチェン寺の施主 陰ヒンジェウのキャ
- ク ・ ドンゼ寺の施主 宋ゼウツェのキャ
- ク ・ ナンゼ (大日如來) 寺の施主 張ツインツェのキャ
- ク ・ チャ…寺の施主 張ディクドのキャ
- ク ・ ターイエ (無邊) 寺の施主 漢テン…の【キャ】

12) gnya' bo rnams kyis shan shan khrid de / sde'i dpon sna / stong pon stong chung dang brgye'u rje lnga rkang gi sug par 'bul zhing

13) 徴税単位でありまた土地制度でもあるキャについては, 岩尾 2007b, Iwao 2010 を参照せよ。なお, Taenzer (2013a, pp. 31-32) もキャについて考察するが, その議論は些か混乱しており, また 1 キャは 6 人で構成されるとするなど, その結論は筆者とかなり異なる。同様の主張は, Taenzer 2013b にも引き継がれる。例えば Taenzer 2013b, p. 222 における rgya drug の解釋に關する議論を見よ。本稿の目的とずれるので詳細は述べないが, p. 222 の議論は Taenzer の 1 キャ=6 人説の根幹部分であるのにも拘らず, 根據の無い推論で成り立っている。

2. 汜タクジクの khram tshan

(内部構成員は略、以下同)

3. 張寺加の khram tshan

4. 李セウランの khram tshan

5. 令狐シュンシュンの khram tshan

6. 王タグの khram tshan

(以下、文書破損)

(IOL Tib J 1357. 原文は岩尾 2007a, pp. 168-169 を参照せよ)

この文書で判明するのは、① brgye'u rje は非チベット人かつ非漢人である、② ギ brgye'u rje の下には6つ以上の khram tshan が属し、一つの khram tshan には10戸が属す、すなわち少なくとも60戸を管轄している、という2点である。①の点は、將頭(五十戸長)は必ず漢人がつくことになっていることと矛盾し<sup>14)</sup>、また②の点、brgye'u rje が五十戸長よりも多い戸数を管轄していることを示す。そこで、筆者は brgye'u rje は少なくとも五十戸長よりも上級職であったことを指摘したのであった(岩尾 2007a, p. 185)。

さらに Taenzer (2013a) は brgye'u rje の解明を推し進めた。元來はひとつづきの文書であったが現在は断片になっている敦煌出土チベット語土地臺帳<sup>15)</sup>を集中的に研究した Taenzer (2013a, pp. 26-27) は、これら土地臺帳が吐谷渾國のものであると断定した上で<sup>16)</sup>、土地臺帳の構造を考察した。その過程で、khri tang bor to khu なる人物が複数回現れることに注目した。

「チタンボルトクの brgya tsan (=tshan) に属するキャの土地との、公の境石がある境界【に至る】」

14) Takeuchi 1994, pp. 848-853 に挙げられる例を参照せよ。

15) この公式土地臺帳の断片は現在のところ IOL Tib J 834-836, 1243, 1456, S. 11404 がある(Iwao 2012)。Taenzer の研究は S. 11404 以外の断片を全てカバーしている。

16) ただし、筆者はこの土地文書の対象土地が吐谷渾國であるという Taenzer 説に賛成しかねる。Taenzer は登場する人名の多くに「吐谷渾的な名前」があることから、青海にあった吐谷渾國('a zha yul) の土地臺帳であると考ええる。しかし、まず吐谷渾人が登場するということと、土地臺帳が吐谷渾國のものであるということはイコールではないし、さらに、この土地臺帳には吐谷渾以外の民族名(多爾 da myi) も登場することを看過してはならない(Takeuchi 1994, pp. 854, 859)。そもそも、この臺帳が敦煌莫高窟から発見されたということからすると、この土地臺帳の対象地区が敦煌付近である方がより自然であるように思う。そのため、土地臺帳は吐谷渾國のものであるというよりは、敦煌付近に駐在した非漢人集團のための土地臺帳である、と筆者は考える。



古代チベット帝国の千戸とその下部組織

khri tang bor to khu brgya tsan gyi rkya zhing dang gnyis kyi mtsams tho pyag rgya  
can

(IOL Tib J 1243, l. 2)

「brgye'u rje であるチタンボルトク」

brgye'u rje khri tang bor to khu

(IOL Tib J 1456, ll. 3, 9)

上述の二箇所において、チタンボルトクは一方では brgya tshan を有しており、かつ brgye'u rje と呼ばれる。brgya tshan とは「百[単位]の tshan」であるから、「百戸」に相当する。したがって、brgye'u rje とは百戸を管轄する役職であり、すなわち百戸長である、と結論したのである。

ここにおいて brgye'u rje が百戸長であることはほぼ間違いないだろう。ただし、brgye'u rje に縮小辭がついている理由について、納得のいく説明はない<sup>17)</sup>。

上述の分析をまとめると、百戸長、五十戸長のそれぞれが一應確認できたということになる。残る問題は百戸長と五十戸長との関係であるが、上記のとおり將頭すなわち五十戸長が五十戸を管理し、そして brgye'u rje が百戸長であると判明したとなると、一人の百戸長が二人の五十戸長（將頭）を管理していたという構造であったとみるのが、最も妥当な考えであろう。將にそれぞれ左右があったというのは、百戸長一人が左右 2 將を管理していたということだと考えられる。

#### 4 十戸と khram tshan

すでに見たように、百戸という単位は brgya tshan という形で存在した。では、その下部単位である十戸についてはどうか。Dotson (2007) によって研究された敦煌出土古い文書 IOL Tib J 740.2 に、それとおぼしき組織名が現れている。

キヤに屬する戸が送付する糧食については、送付物が受取手 (lit. 「他人」) に届くように梱包すべきであり、今は各千戸の下で、千戸内の管轄にします。bcu tshan と khram tshan が送るようにすべきである<sup>18)</sup>。

17) Taenzer (2013b, p. 72) では brgye'u rje とは元來 brgya'i rje という形であったと主張するが、その主張には特に根據があるわけではない。

18) 本文書のチベット文は大變解釋が難しく、上記もあくまで假譯にすぎない。念のために、

rkyar btab pe'i sgos rdzong 'dī lta bo rdzang gzhan la dbab par nī ltang bur bab pas da'  
ltar / stong sde so'i 'og nang srīd du bgyis nas bcu tshan dang khram tshan gyIs  
rdzong ba' du mchis

(IOL Tib J 740. 2, ll. 339-341. Dotson 2007, 55-56)

前後の文脈からみて、ここで現れる bcu tshan と khram tshan は明らかに千戸の内部単位である。そして bcu tshan (=「十」の「集團」) は、brgya tshan (「百戸」) という語から類推すると十戸を意味するのは明らかであろう。つまり、千戸の中において十戸という集團が存在していたということになる。そうすると、千戸の下には、百戸 (brgya tshan)、五十戸、十戸 (bcu tshan) がそれぞれ存在していたのである。

Takeuchi (1994, p. 854) は khram tshan が土地文書に現れることから、これを経済的な機能を有するグループではないか、と推測した。土地文書には、東の境界は某の khram tshan である、との記述も見られるから (Ch. 79. XIV. 5, l. 2), khram tshan とは名目上の集合単位ではなく、実際に同一の場所に土地を有した集團であったと考えられる。さらに土地訴訟文書である敦煌チベット語文書 P. t. 1078bis には khram に關して次のようにある (岩尾 2007a, pp. 182-183)。

以前、【王ゴーコンと杜コクユンは】中國【支配】の時より畝續きに住んでいたが、  
後に沙州【漢】人がキャ (徵稅單位) に屬され、…のキャの土地 5.5 ドルづつを、共  
に khram に定め、土地帳を記載したあとで、

gna' rgyaI tshe nas mu sbrel du mchis pa las / / slad gyis sha cu pa rkyar sbyard /  
[...] gyI rkyā zhing dor phyedang drug drug mnyaM bar khram du btab pa las / /  
zhing yig dkar cag 'dris paI 'og du [...]

(P. t. 1078bis, ll. 15-16)<sup>19)</sup>

お互いの土地を khram に定めたとあるから、ここで言う khram が土地に關する何がしかの取り決めであることが推測できる。また、IOL Tib J 1357 においても khram tshan の構

Dotson の英譯も引用しておこう。"Concerning their provisioning through planting the harvest, and their provisions falling to someone else, they are put in bales (ltang-bu bab), and, under the soldiers of the thousand-district (stong-sde so'i og), they become internal affairs (nang-srid). They then go to be sent as provisions by the group of ten (bcu-tshan) and the tally group (khram-tshan)". (Dotson 2007, pp. 55-56).

19) P. t. 1078bis の研究については、岩尾 2006 を参照せよ。

成員は全て徴税単位でありまた土地単位でもあるキャを有していた。このようなことを総合すると, khram tshan とは同一の地域に土地を有する戸の集まりであり, その規模は 10 戸であったと考えて良いであろう。

さらに興味深いのは, IOL Tib J 1357 の khram tshan の構成員が, P. ch. 2162v 「左三將納丑年突田歴」<sup>20)</sup> にも共通して登場しているということである (岩尾 2007a, p. 176)。表 1 を見れば明らかなおと, 共通する人物 13 人たちは IOL Tib J 1357 のリストのうち, 張寺加と汜タクジクが長をつとめる khram tshan に集中している。特に張寺加の khram tshan については 10 人中 8 人までが一致しており, しかも彼らは P. ch. 2162v においても 11 行から 21 行までに集中して登記されていることに注目したい。汜タクジクの tshan については, 残念ながら P. ch. 2162v の左端が破損していて 29 行以降は失われているものの, それでも 22 行以降において 4 人が一致する。このように, P. ch. 2162v において khram tshan が固まって登記されていることは, 偶然とは考えにくい。

そこで試みに, P. ch. 2162v のリストをはじめから 10 人ずつで区切っていくと, ちょうど 2 グループ目 (12 行目~21 行目) が張寺加の khram tshan にびたりと符號する。さらに 3 グループ目 (22 行目以降) については汜タクジクの khram tshan にあてはまる。もちろん全てがあてはまるわけではなく, 例えば 1 グループ目 (2 行目~11 行目) については問題が有る。ただ一人, 8 行目の陰云のみが IOL Tib J 1357 の ing hing yun と同一人物である可能性があるのみで, 他の人物は全く一致しないのである。あるいは P. ch. 2162v と時代に差があり, その間に戸主が入れ替わったのかもしれない。

---

20) 池田 1979, p. 543, 唐・陸 1986-90, vol. 3, pp. 405-406.

表1 P.ch2162v 中に現れる人名と IOL Tibj 1357 の人名との対応

P.ch2162v に 現れる人名	IOL Tibj 1357 中、対応 すると考えられる人名	khram tshan 長	
張逸 (2)			cang lha legs の khram tshan?
索榮 (3)			
王澣 (4)			
宋暉 (5)			
陰朝 (6)			
張進卿 (7)			
陰云 (8)	^ing hing yun (陰[興]云)	cang lha legs	
張迪 (9)			
索子京 (10)			
汜金 (11)			
張寺加 (12)	cang si ka (張寺加)	cang si ka	cang si ka の khram tshan?
劉滿子 (13)	li'u man tse (劉滿子)	cang si ka	
王付德 (14)			
杜黑子 (15)			
劉問 (16)	li'u bun 'de (劉問['de])	cang si ka	
張加珍 (17)	cang ka cing (張加珍)	cang si ka	
李延奴 (18)	li yen do (李延奴)	cang si ka	
杜太平 (19)	do the 'I beng (杜太平)	cang si ka	
雷廣 (20)	lve 'i kvang do (雷廣[奴])	cang si ka	
董清 (21)	dong yu tsheng (董[yu]清)	cang si ka	
汜辨 (22)			bam stag gzigs の khram tshan?
令狐小郎 (23)	leng ho si 'u lang (令狐小郎)	bam stag gzigs	
汜清 (24)	bam tsheng (汜清)	bam stag gzigs	
汜超 (25)	bam che 'u 'do (汜超奴)	bam stag gzigs	
張閨 (26)			
索蕃奴 (27)			
武光兒 (28)	bu kvang si (武光兒)	bam stag gzigs	
□□ (29)			

注記1：P.ch. 2162v の人物を軸にした表であり、IOL Tib J1357 のみに現れる人物は表から除いてある。

注記2：人名の後ろに付加した（ ）内の数字は池田 1979, p. 543 の行数に対応する。

注記3：P.ch. 2162v の人名はしばしば省略されている。例えば 25 行目の汜超は IOL Tib J1357 の bam che 'u 'do (汜超奴) にあたると考えられ、「奴」の字が省略されている。

khram tshan は同一地域に土地を有するだけではなく、徴税のリストでも五十戸（將）の下部組織として認識されていたらしい。これは、1つの五十戸（將）には5つの khram tshan が属していたということでもある。

さて、すでに述べたように五十戸長（將頭）は納税をしなくてよい代わりに同將の納税を納付先まで運搬する義務があったが、では khram tshan の長には如何なる義務があったのか。興味深いことに、P. ch. 3491verso「左七將西年徴突田簿」には、

- 1 左七將
- 2 酉年應徵突田戸惣五十三
- 3 戸五 方印及封戸破除
- 4 張清 蔡期 李斌 陰惟興 宋太平<sup>下</sup>
- 5 戸冊八全徵 計納麥四百廿八駄 粟一百一十七駄
- 6 [ ] 駟粟四駄  
(後 缺)

(P. ch. 3491verso)<sup>21)</sup>

とあり、方印（チベット政府の公文書）を有するか封戸であった五戸が免税であったことが分かる。將には5つの khram tshan があったのであるから、これら五戸は khram tshan のリーダーの戸であったのかもしれない。

ここで問題となるのが、十戸と khram tshan との関係である。IOL Tib J 740 を譯した Dotson (2007, pp. 58-59) はこの二つの集團を別個のものとして考えている。しかし、先に引用した IOL Tib J 1357 によると、khram tshan は千戸の將の下部単位であり、かつ10戸で構成されていた。十戸と khram tshan とは、つまり同じ規模の単位なのであり、これらが實際上のところ十戸と全く異なる集團であると考えるのは非常に難しいと思う。むしろ、両者の指す集團が同一であって、機能によって名稱を換えていたと考えるべきだろう。

さて、ここで再度 tshan について考察してみよう。Takeuchi 1994 の収集した tshan の例を一覧すると、ただ単に tshan と呼ばれる集團の他に、tshan には bcu tshan (十戸) や brgya tshan (百戸) といった、規模を名稱に加えたものと、khram tshan, dog tshan, dar tshan など、役割機能を名稱に加えたものの二つが存在することに気づく。前者は明らかに sde における khri sde (萬戸) や stong sde (千戸) と同系統であり、sde と共に萬、千、百、十という一つの體系をなしている。

khri sde - stong sde - brgya tshan - bcu tshan

萬戸      千戸      百戸      十戸

ここで問題となるのは、五十戸の位置づけである。五十戸は單に tshan や將と呼ばれた一方で、決して lnga bcu tshan と呼ばれなかったのである。その意味においては、五十戸

---

21) 録文は池田 1990, p. 55, 唐・陸 1986-90, vol. 2, pp. 375-376 を参考にしつつ, International Dunhuang Project (<http://idp.co.uk>) にあるデジタルカラー寫眞を元にして筆者が作成した。なお唐・陸は P. ch. 3491verso pièce 3 も本文書と元來同一の斷片であったとみる。

という集團は、厳密に言えば上の sde-tshan の體系に當てはまらない。しかし五十戸が明らかにチベット由來の制度であることは、Takeuchi 1994, pp. 852-853 が指摘しているところである。以上のことからすると、五十戸という單位は、上のような 10 進法的な sde-tshan の體系が完成した後、追加された單位であることを示唆するのかもしれない。

## 5 小 結

以上、古代チベット帝國の軍制のうち、特に千戸の内部構造について考察してきた。考察の結果をまとめると、次のようになるだろう。チベットの千戸内にはやはり百戸 (brgya tshan) や十戸 (bcu tshan) が存在した。百戸を統べるのは brgye'u rje であり、少なくとも敦煌の場合には、非漢人が就いた役職であった。百戸には 2 つの五十戸 (將) が屬した。各五十戸はさらに 5 つの khram tshan,あるいは十戸 (bcu tshan) に分かれていた。以上の結果を圖示すると、次のようになる (圖 1)。

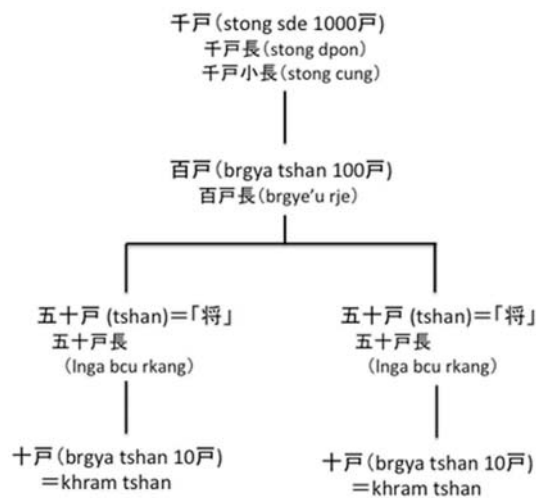


圖 1 千戸の内部構造

古代チベットにも百戸、十戸が存在したことが明らかになったことにより、古代チベットの軍制と、北方遊牧民族の十進法的軍制との類似はより明らかになった。しかし一方で、五十戸という單位も存在しており、チベット独自の行政單位であった可能性がある。いずれにせよ、今後古代チベットの軍制は他の國家の軍制との比較検討を視野に入れつつ分析する必要があるだろう。また、千戸の末端單位である十戸が同時に khram tshan という同一地域の土地所有を前提とする組織であったということも、注意すべきである

う。つまりチベットの千戸制の根本には土地制が密接に絡んでいたものであり、形式的には遊牧国家と類似する軍制を有するとはいえ、農耕地域に設置されることを前提としているという点において、その運用方法は遊牧国家のそれと異なるということになる。このことはチベット帝国の成り立ちやチベット人の生活形態とも関係する重要な問題であるが、本稿のテーマといささかずれるので、稿を改めて論じることにはしたい。

#### 参考文献

『賢者喜宴』: Dpa' bo gtsug lag phreng ba, *Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*. 北京: 民族出版社, 1986.  
『華鬘』: Nel pa pandita, *Me tog phreng ba*. H. Uebach, *Nel pa Paṇḍita's Chronik Me tog phreng ba*, Munich, 1987.

池田温

1979. 『中国古代理帳研究』 東京: 東京大学出版会.  
1990. 「敦煌における土地税役制をめぐって —— 九世紀を中心として ——」 唐代史研究会 (編) 『東アジア古文書の史的研究』 東京, pp. 46-70.

岩尾一史

2000. 「吐蕃のルと千戸」 『東洋史研究』 第59巻第3号, pp. 1-33.  
2004. 「吐蕃の萬戸 (*khri sde*) について」 『日本西藏學會々報』 第50号, pp. 3-15.  
2006. 「Peliot tibétain 1078bis よりみた吐蕃の土地區畫」 『日本敦煌學論叢』 第1巻, pp. 1-26.  
2007a. 「チベット支配下敦煌の納入寄進用リスト —— IOL Tib J 575, 1357 (A), (B) の紹介 ——」 『敦煌寫本研究年報』 創刊号, pp. 165-189.  
2007b. 「キャ制 (*kyā*) の研究序説 —— 古代チベット帝国の社會制度 ——」 『東方學』 第113輯, pp. 118-103 (逆頁)

王堯・陳踐

1989. 「吐蕃職官考信録」 『中國藏學』 1989-1, pp. 102-117.

佐藤長

1977. 『古代チベット史研究』 2巻, 京都: 同朋舎 (初版: 1958-59).

武内紹人

1990. 「中央アジア出土古チベット語家畜賣買文書」 『内陸アジア言語の研究』 5, pp. 33-67.

唐耕藕・陸宏基 (編)

1986-90. 『敦煌社會經濟文獻真蹟釋録』 全5巻, 北京: 全國圖書館文獻縮微複製中心・古佚小説會.

藤枝晃

1961. 「吐蕃支配期の敦煌」 『東方學報』 第31冊, pp. 199-292.

山口瑞鳳

1981. 「沙州漢人による古代チベット二軍團の成立と mKhar tsan 軍團の位置」 『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』 4, pp. 13-48.  
1983. 『吐蕃王國成立史研究』 東京: 岩波書店.

Bacot, J., Thomas, F. W., & Toussaint, G. -C.

1940-46. *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*. Paris: Librairie orientaliste Paul

- Geuthner.
- Dotson, B.,
2007. Divination and Law in the Tibetan Empire : the Role of Dice in the Legislation of Loans, Interest, Marital Law and Troop Conscription. In M. Kapstein and B. Dotson (eds.), *Contributions to the Cultural History of Early Tibet*. Leiden : Brill, pp. 3-77.
- Iwao, K.
2007. On the Old Tibetan *Khri sde*. In 沈衛榮 (編)『西域歷史語言研究集刊』第1輯. 北京 : 科學出版社, pp. 209-226.
2010. An Analysis of the Term *rkya* in the Context of the Social System of the Old Tibetan Empire, *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko*, 67, pp. 89-108.
2012. Preliminary Study on the Old Tibetan Land Registries from Central Asia. In 新疆吐魯番學研究院 (編)『語言背後的歷史 : 西域古典語言學高峰論壇文集』上海 : 上海古籍出版社, pp. 175-182.
- Lalou, M.
1955. Revendications des fonctionnaires du grand Tibet au VIII<sup>e</sup> siècle. *Journal Asiatique*, 243, pp. 171-212.
- van Schaik, S.
2011. A New Look at the Tibetan Invention of Writing. In Y. Imaeda and M. Kapstein (eds.), *New Studies of the Old Tibetan Documents : Philology, History and Religion : Old Tibetan Documents Online Monograph Series vol. 3*. Tokyo : Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, pp. 45-96.
- Scherrer-Schaub, C.
2007. Revendications et recours hiérarchique : contribution à l'histoire de Śa cu sous administration tibétaine. In J. -P. Drège (ed.), *Études de Dunhuang et Turfan*. Genève : Droz, pp. 257-326.
- Taenzer, G.
- 2013a. The 'A zha Country under the Tibetans in the 8th and 9th Century : A Survey of Land Registration and Taxation Based on a Sequence of Three Manuscripts of the Stein Collection from Dunhuang. In B. Dotson, K. Iwao, and T. Takeuchi (eds.), *Scribes, Texts, and Rituals in Early Tibet and Dunhuang*. Wiesbaden : Reichert Verlag, pp. 25-42.
- 2013b. *The Dunhuang Region during Tibetan Rule (787-848) : A Study of the Secular Manuscripts Discovered in the Mogao Caves*. Wiesbaden : Harrassowitz Verlag.
- Takeuchi, Tsuguhito
1994. *Tshan* : Subordinate Administrative Units of the Thousand-Districts in the Tibetan Empire. In P. Kvaerne (ed.), *Tibetan Studies : Proceedings of the sixth Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Fagernes 1992*. Oslo : The Institute for Comparative Research in Human Culture, pp. 848-862.
1995. *Old Tibetan Contracts from Central Asia*, Tokyo : Daizo shuppan.
2004. The Tibetan Military System and Its Activities from Khotan to Lop-Nor. In S. Whitfield (ed.), *The Silk Road : Trade, Travel, War and Faith*. London : The British Library, pp. 50-56.
2008. *Tshar, Srang, and Tshan* : Administrative Units in Tibetan-ruled Khotan. *Journal of Inner Asian Art and Archaeology*, 2008/3, pp. 145-148.
- Thomas, F. W.



古代チベット帝國の千戸とその下部組織

1951. *Tibetan Literary Texts Concerning Chinese Turkestan*, vol. 2, London : Royal Asiatic Society.  
Tucci, G.
1949. *Tibetan Painted Scrolls*, 3 vols. Rome : La Libreria Dello Stato.  
Uray, G.,
1960. The Four Horns of Tibet According to the Royal Annals. *Acta Orientalia Hungaricae*, 10, pp. 31-57.
1964. Nerasshifrovannye Tituly Dostoinstva v Carskich Annalakh Tibeta. *Kratkyye Soobtseniya Instituta Narodov Azii*, 83, pp. 184-188.
1980. Khrom : Administrative Units of the Tibetan Empire in the 7th-9th Centuries. In *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson : Proceedings of the International Seminar on Tibetan Studies, Oxford, 1979*. Warminster : Aris & Phillips, pp. 310-318.
1982. Notes on the Thousand-districts of the Tibetan Empire in the First Half of the Ninth Century. *Acta Orientalia Hungaricae*, 36, pp. 545-548.

[本研究は科研費・若手研究 (B) 2370342 による成果の一部である。]

*Brgya-tshan, tshan and bcu-tshan :*

The Thousand-district and its Subunits in the Old Tibetan Empire

Kazushi IWAO

Since the 1940s, the military administration of the Old Tibetan Empire (c. 600–842) has been studied by scholars such as Giuseppe Tucci (1949) and Sato Hisashi (1958–59). These studies have clarified the basic structure of the military system in Central Tibet, such as the *ru* and the thousand-district (*stong sde*). However, the subordinate units of the thousand-district are yet to be scrutinised. Takeuchi Tsuguhito's pioneering work on the subunits of the thousand-district in the Tibet-ruled Dunhuang (Takeuchi 1994) revealed the basic function of the subunit *tshan*. However, there are several other subunits such as *brgya-tshan*, *tshan*, *bcu-tshan* and *khram-tshan* which are yet to be studied.

This paper re-examines the basic structure of the thousand-district during the Old Tibetan Empire. The author analyses several subunits of the thousand-district and their organisation by mainly drawing on Old Tibetan and Chinese texts from Dunhuang.